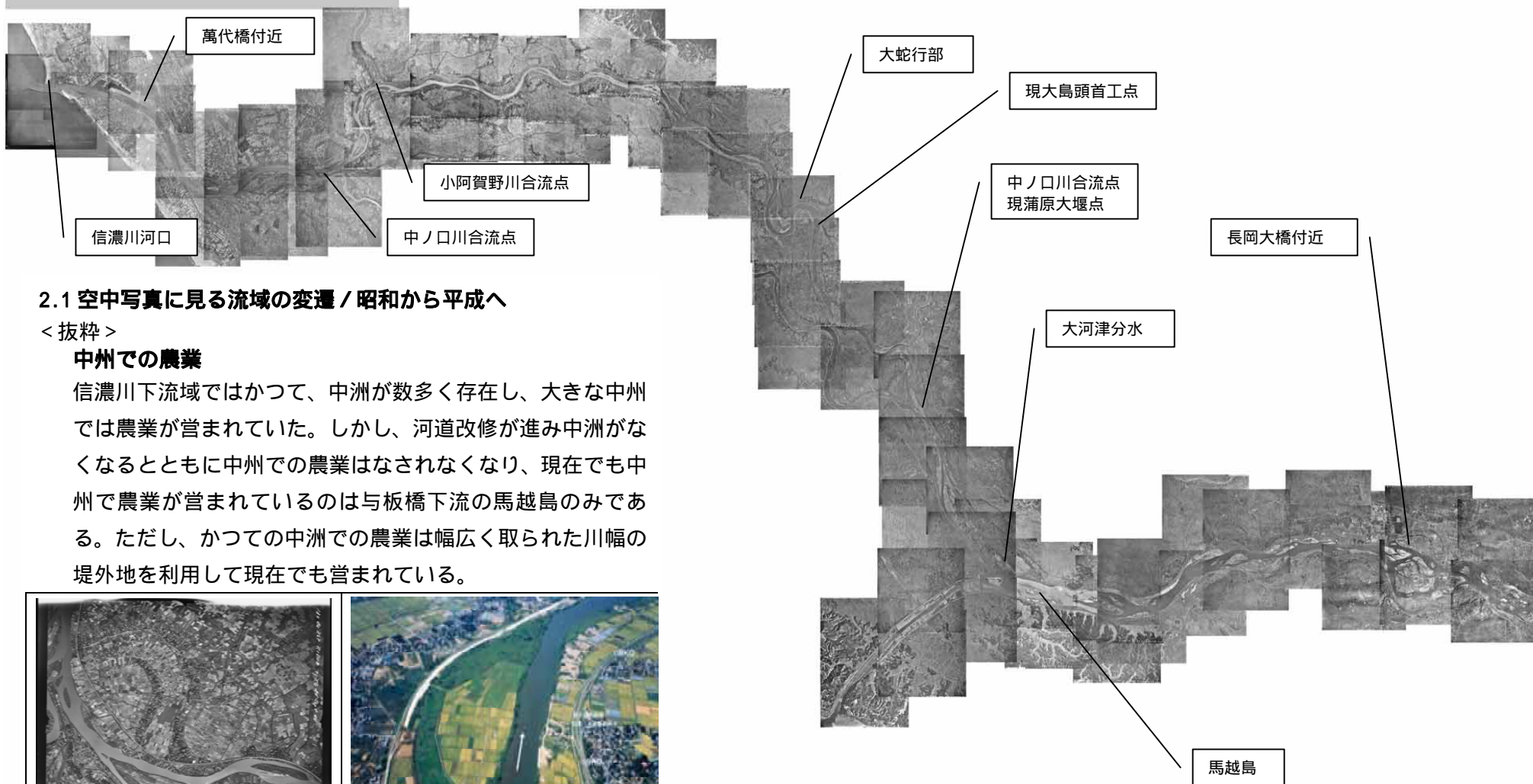


## 2. 信濃川下流域の基礎資料

### 信濃川下流域全景

信濃川下流域について米軍が昭和22年(1947年)撮影した航空写真をつなげると下記の図のようになる。

全体的に現在と比較すると閘屋分水ができたこと以外、大幅な流路変更は見受けられないが、～で述べたような中州や構造物の変化などが各所で見受けられる。



### 2.1 空中写真に見る流域の変遷 / 昭和から平成へ

< 抜粋 >

#### 中州での農業

信濃川下流域ではかつて、中洲が数多く存在し、大きな中洲では農業が営まれていた。しかし、河道改修が進み中洲がなくなるとともに中洲での農業はなされなくなり、現在でも中洲で農業が営まれているのは与板橋下流の馬越島のみである。ただし、かつての中洲での農業は幅広く取られた川幅の堤外地を利用して現在でも営まれている。



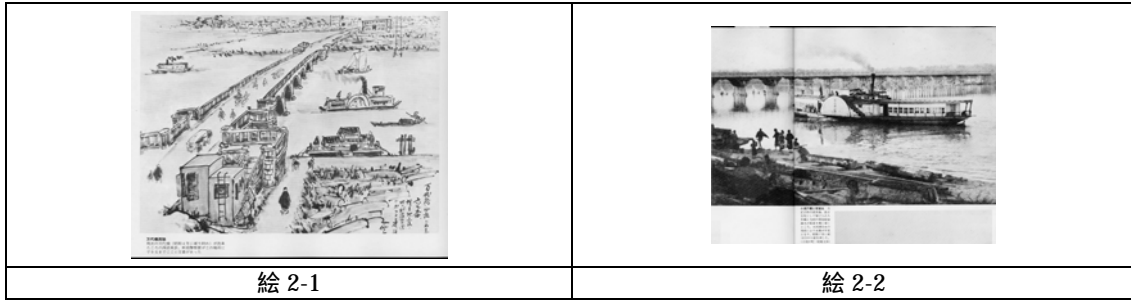
写真 2 - 1

写真 2 - 2

## 2.2 舟運に関する風景写真に見る流域の変遷

新潟の風景を描く高橋五仙子の「思い出の新潟百景」(新潟日報事業社)、「新潟県の100年」から抜粋 万代橋から下流側を撮影した外輪船。手漕ぎの渡し舟も盛んであった。

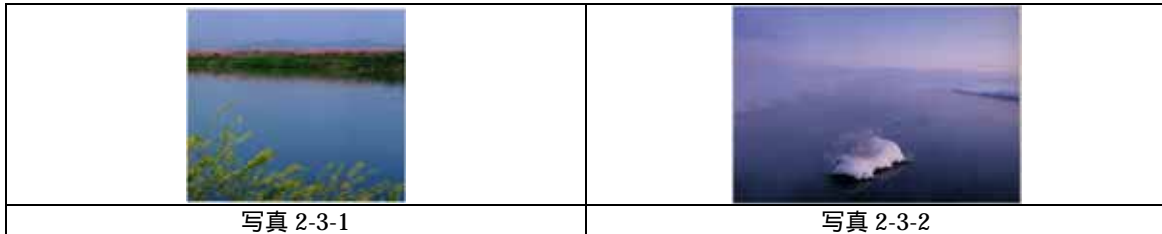
<抜粋>



## 2.3 写真・絵画に見る四季の変化

日本最長の河川であり、雄大な川としての印象が強い信濃川を題材とした、写真、絵画は数多く発表されている。その中でも、弓納持福夫氏は信濃川下流域を中心に数多くの風景写真を発表している。

<抜粋>



## 3. 対象区域航行調査の分析

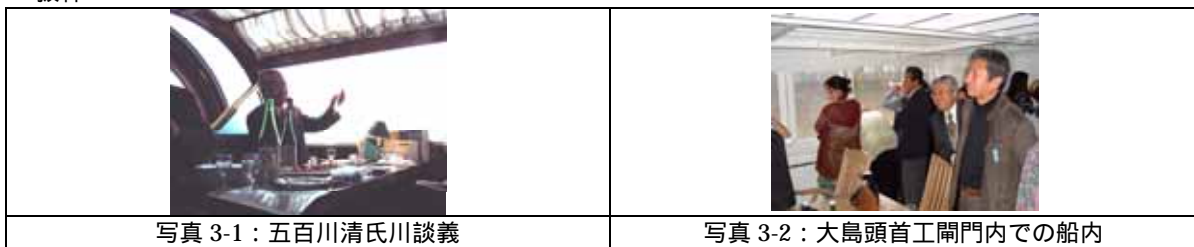
### 3.1 新潟 - 分水間舟運ツアー 平成 15 年 4 月 18 日(金)

このツアーは、かつて栄えていた信濃川における舟運が、新潟 - 分水間の長距離ルートにおいて、乗客を楽しませるだけの価値があるのかを探るための調査を兼ねたものであった。そのため、道中のプログラムには舟運についてのスライドショーや画家長谷川久彦の指導による川の風景のスケッチ、音楽生演奏に加え、嶋悌二(財)こしじ水と緑の会) 五百川清(信濃川大河津資料館館長) 大熊孝(新潟大学工学部教授)らによる信濃川と流域住民の歴史、生活、文化についての談義がなされ、ツアーの価値を高めていた。

#### 大島頭首工・蒲原大堰の開門の通過・屋上デッキ

大島頭首工・蒲原大堰は4月1日～9月30日までの間、灌漑用の取水のためゲートが閉められ、舟は開門を通過する必要がある。大島頭首工・蒲原大堰共に通過に30分程度を要する。

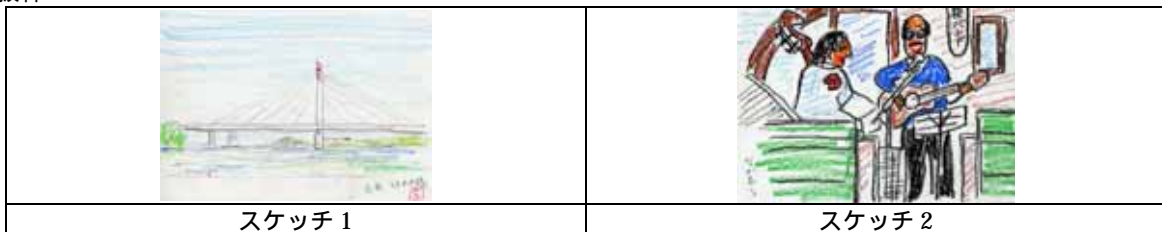
<抜粋>

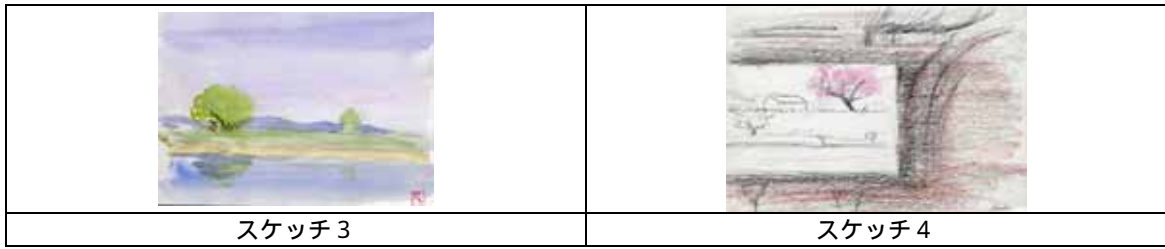


#### スケッチ・短歌に見る舟からの景観

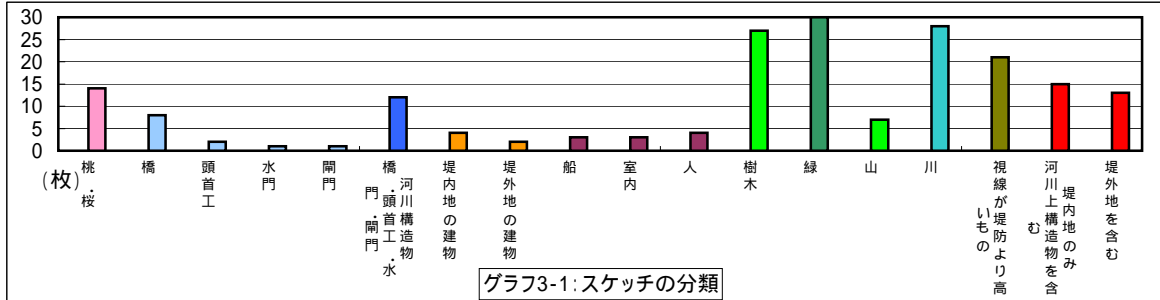
当日は、出発直後より、スケッチブックとクレヨンが20セット程度参加者に配られ、画家の長谷川久彦氏の簡単なレクチャーのあと、希望者が「信濃川八景」をテーマにスケッチを行った。

<抜粋>





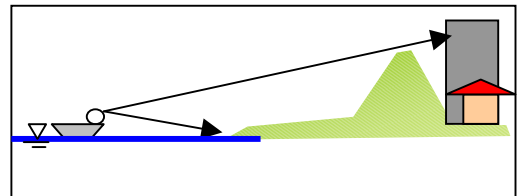
これらを分類すると、桃、または桜の木が描かれているものは大変多く14枚あり、風景の中心としてえがかれているものが多かった。また、えがかれたものでそれぞれ分類すると次のようになった。



これによると信濃川の水面上からの風景として、最も一般的に見えていた樹木等の緑と、川の水面がほとんどのスケッチに描かれ、航行中常に見られた光景であった事がわかる。特に緑は堤外地の川畑や、樹木だけでなく、植物によって被覆されている堤防法面を表している。

信濃川の水面からの景観において、舟からの視界において水面から上の大部分は、高く盛られている堤防のため、堤外地の情報しか得られず、図3-1のように堤内地の構造物は背の高いものしか見ることができない。

そのため、堤外地の建物がえがかれたものは極端に少なくなっている。参加者の一人である松井ヒロさんは20句の俳句を残しており、土木構造物、景観を歌った句が数多くあったので抜粋を紹介する。



< 抜粋 >

- ・ 朱鷺メッセよりの船旅 花の昼
- ・ 山となす 春水を吐き 船の上
- ・ 川面より 五段六段 梨の花
- ・ 春光を 集め船尾の 水しぶき
- ・ 遊船の 波護岸へと 打ち寄せる
- ・ 橋治水 酒の話や 船うらら
- ・ メドレーは 春のうららの 信濃川

時間	場所
13:05	朱鷺メッセ出発
13:15	万代橋西詰
14:00	ふるさと村
14:25	小阿賀野川合流付近
15:00	小須戸橋
15:30	庄瀬橋手前
16:15	五反田橋付近
16:30	前須田付近
16:50	大島頭首工着
17:25	大島頭首工出
17:37	中ノ口川と最接近
18:05	蒲原大堰着
19:20	本川橋着

**航行時間・航行距離**

当初の予定としては13:00に朱鷺メッセを出発し17:00に蒲原大堰を通過し、18:15に大河津分水閘門上流にて着岸というスケジュールであった。蒲原大堰での閘門操作のトラブルなどによりスケジュールが遅れ、表3-3のようなスケジュールで運航された。

6時間の船旅は、本来相当の疲労を伴うものであるにもかかわらず、参加者の満足度はかなり高いものであった。これは、閘門通過や、川談義、スケッチといった道中のイベントが参加者を飽きさせなかった事が大きな理由である。また、航行速度が10km/h程度と、人間が走る、または自転車程度の速度であったため、風景をじっくり観察できることなども効果的であったといえる。新潟 - 分水間の航路は航行距離が約60kmと長く、旅客船が運航される場合、国内でもっとも長い航路である。

**3.2 新潟 - 分水間調査航行 平成15年7月20日(日)**

7月20日(日) 信濃川ウォーターシャトル(株)の遡上航行に同行、夏季における航路調査を行った。

< 抜粋 >

**万代橋 ふるさと村間**

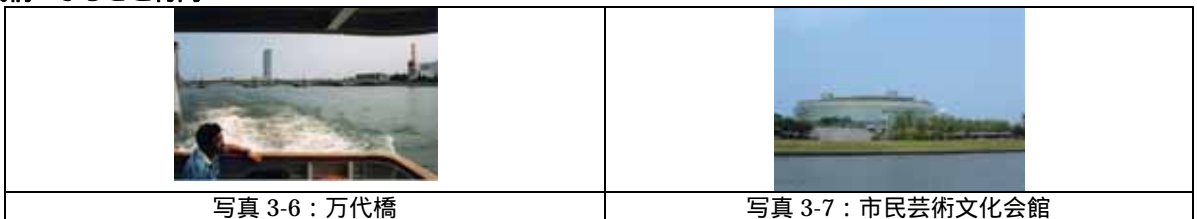


写真 3-6 : 万代橋

写真 3-7 : 市民芸術文化会館

ふるさと村 大島頭首工間



大島頭首工 本川橋間



航行時間と航行速度

この航行では、橋を現在地が把握できる重要なランドマークと位置付け、通過時間を記録、各区分における通過所要時間と平均航行速度を求めた。

表 3-4: 通過時間と航行速度(7月 20 日)

河口からの距離 (km) *	地点	通過時間	前地点からの距離	所要時間	(min)	(h)	速度 (km/h)
-3.5	万代橋橋詰	11:07					
5.5	ふるさと村(着)	11:50	9.0	0:43	43	0.7	12.6
5.5	ふるさと村(出)	12:25	0.0	0:35	35	0.6	0.0
11.5	酒屋	12:53	6.0	0:28	28	0.5	12.9
16.5	白井橋	13:20	5.0	0:27	27	0.5	11.1
20.5	小須戸橋	13:40	4.0	0:20	20	0.3	12.0
25.8	庄瀬橋	14:15	5.3	0:35	35	0.6	9.1
28.7	五反田橋	14:36	2.9	0:21	21	0.4	8.3
34.6	大島頭首工(着)	15:25	5.9	0:49	49	0.8	7.2
34.6	大島頭首工(出)	15:55	0.0	0:30	30	0.5	0.0
35.8	景雲橋	16:00	1.2	0:05	5	0.1	14.4
40.0	石上大橋	16:20	4.2	0:20	20	0.3	12.6
41.2	五十嵐川合流	16:25	1.2	0:05	5	0.1	14.4
43.2	蒲原大堰(着)	16:35	2.0	0:10	10	0.2	12.0
43.2	蒲原大堰(出)	17:00	0.0	0:25	25	0.4	0.0
47.0	刈谷田川	17:20	3.8	0:20	20	0.3	11.4
50.5	本川橋	17:40	3.5	0:20	20	0.3	10.5

\* 河口からの距離は「信濃川下流写真集」を参考に算出(関屋分水河口が 0 km)

この航行では万代橋から本川橋まで 6 時間を要している。4 月の航行においても所要時間は約 6 時間であったが基本的な所要時間であるといえる。また、下りはさらに時間が短縮され、信濃川ウォーターシャトル(株)によると 4 月の航行で要した時間は約 4 時間 30 分であった。

